

論文

色嗜好の母子間比較
—— 色の好みは親子間で伝播するのか？ ——

中 村 信 次

日本福祉大学 子ども発達学部

Comparisons of Color Preference between Mother and Child
—— Is Color Preference Inheritable from Mother to Child ? ——

Shinji NAKAMURA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Keywords : 色嗜好, 配色, 母子間比較

Abstract

In the present study, the effects of rearing environment on color preference were investigated by comparing color preference between mother and child. A psychological survey was carried out with 53 pairs of mothers and children, inquiring color preference/color avoidance against various samples (e.g., single color patch, bi-color combination, scenic picture). There is no systematic relationship between mother and child concerning color preference/avoidance against simple and abstract targets (single color patch or bi-color combination). On the other hand, in the case of color preference against a more complicated and specific visual object (e.g. picture), patterns of preferred color can be significantly inherited from mother to child.

Keywords : color preference, color combination, comparison between mother and child

要約

本研究では、色嗜好の母子間比較を行うことにより、成育環境が色の好みの形成に及ぼす影響を検討した。具体的には、母子53組を対象とし、種々の評価対象（単色、2色配色、風景写真）に対する嗜好・忌避の調査を行った。調査の結果、単色や2色配色といった単純な対象に対する嗜好・嫌忌判断では、母子間において有意な連関を認めることはできなかった。しかしながら、実際

の風景を撮影した写真という、より複雑な視覚対象に対する嗜好判断においては、母子間での有意な嗜好パターンの伝播が起こりうることを示された。

1. 背景

色嗜好 (color preference) とは、個々人に固有の色彩に対する好みのことを指す。色嗜好が色彩科学の大きな研究対象であることは論を待たずともなく、多くの研

研究者が多様な方法を用いてこの問題にアプローチしている [1]。高橋らは、これらの色嗜好研究を4つのカテゴリー、すなわち 集団の色嗜好特性の経年調査、色嗜好に影響する文化社会的要因を探る異文化間比較調査、

色嗜好を規定する刺激特性の分析的アプローチ、個人の色嗜好成立の認知過程を検討する心理学的アプローチ、に分類している [2]。

例えば、集団の色嗜好特性の経年調査においては、1979年から1992年まで継続的に行われた(財)日本色彩研究所における嗜好色の大規模な縦断的調査が代表例として挙げられる [3]。また、齋藤らは、異文化間比較に関する一連の研究において、アジア諸国の嗜好色を比較し、文化を超えた一貫性を見出している (例えば, [4])。また、このアプローチに関しても古くから精力的な研究がなされており、たとえば色相に関しては多くの文化圏において青が好まれる傾向が高く (例えば, [5] [6])、明度 (色の明るさ)、彩度 (色の鮮やかさ) に関しては高明度・高彩度 (明るく鮮やかな色) が選好されやすいとされている (例えば, [7] [8])。

これらの研究は、「どのような色が、(どのような評価者において)好まれるのか」という問題意識に根ざしており、“色視点での色嗜好研究”と位置づけることができる [2]。これらのアプローチに関しては、古くから膨大な研究蓄積がなされており、我々の色に関わる行動の理解に関し大いに貢献している。一方、「なぜ人は(ある特定の)色を好むのか」という“人視点での色嗜好研究”に関しては、高橋らも指摘する通り、あまり検討がなされてきてはいない。「その人がある特定の色を好む際に(もしくは嫌う際に)どのような認知的な情報処理がなされるのか」という色嗜好に関わる内的処理プロセスや、「そもそも、なぜその人がある特定の色を好む(もしくは嫌う)ようになったのか」という色嗜好の発生メカニズムに関しては、今後のより一層の検討を進めなければならない色彩科学上の課題となっている。

我々はなぜ特定の色を好み、特定の色を嫌うのであろうか? 前述のごとく、色嗜好に文化的・時代的背景を超えた共通性が認められることから、人類共通の生理学的・心理学的基盤に根差した要素が存在することは明らかである。また、環境に遍在する自然対象の色彩から色に対する共通の抽象的印象が形成されることもある (例えば、赤は血を連想させることにより観察者に緊張を与え、茶褐色は腐敗色を通じて忌避の感情を喚起する)。

一方、年度ごとに決定される流行色に端的に示されるように、個々人の色嗜好が社会的・文化的背景に影響を受ける側面もまた否定しえない。色嗜好の概念を心理学的に一般化すると、「色に対する態度」であるとする事ができる^{*1}。我々が生育の過程において、さまざまな事物、概念に対する態度を形成していくことを考えると、態度が個々人の生育歴、生育環境により影響を受けると考えることは当然のことである。したがって、色に対する態度である色嗜好に関しても、当該者の生育環境が大きな影響を及ぼしているものと考えられる。

先述の「なぜその人がある色を好きになるのか?」という疑問に答えるためにも、生育歴・生育環境が色嗜好に及ぼす影響を明らかにすることが望まれる。しかしながら、その人の生育環境をすべて理解し、それを類型化することは、厳密にはその人の生育歴上の出来事(ライフイベント)をすべて把握することと等価であり、実際上は非常に困難である。そこで本研究では、幼児期から児童期前期の子どもを対象に、さまざまな様態の色刺激に対する嗜好の程度を母子間で同時に分析することにより、母親の色嗜好がどういう側面でどのように子どもの色嗜好に影響を及ぼすのかを検討する。当該年齢の子どもにおいては、より年長の子供に比して、生育環境に占める家庭の役割の比率が高いものと考えられる。親が環境を整備した(したがって室内配色も親が決定をした)自宅で過ごす時間が長く、また服装や身の回りの品なども、自分で選択して購入するよりは親が選択したものを身につける場面が多いと考えられる。したがって、もし色嗜好が生育環境の影響を受けるとするならば、何らかの形で親の色嗜好が子どもにも伝搬する可能性を想定することができる。また、母子世代間で色嗜好・色忌避の関連を調べるという本研究のアプローチは、山岸らが指摘する「子育て環境としての色彩景觀 [10]」を検討する上でも有益な知見を提供することができるものと考えられる。

2. 方法

愛知県知多郡に所在する児童対象の娯楽施設(南知多ビーチランド内「南知多おもちゃ王国」)において、来園者を対象に色嗜好に関する調査を実施した(調査日: 2009年10月30日)。調査日は快晴であり、調査時間(おおよそ10時から15時)を通じて色嗜好回答に十分な照度は保たれていた。

調査内容は、単色の嗜好、2色配色の嗜好、実際の風景の色に対する嗜好の3部から構成されていた。まず、来園の母子に調査の協力を依頼したのち、年齢等の基礎事項を聴取した。単色の嗜好に関しては、新配色カード199（日本色研事業株式会社）から21色を選択し、3cm四方の大きさに切りだしたものを白色台紙の上に配列して回答者に示し、母子のそれぞれから、好きな色・嫌いな色を3色ずつ選択してもらった。2色配色の嗜好に関しては、単色嗜好調査に用いた色票を左右に組み合わせ、36対の2色配色を作り出し、同じく白色台紙上に配置した（台紙の大きさの都合上、3枚の個別のシートに分けて配置されることとなった）。回答者は、2色配色に関しても、好きな配色と嫌いな配色をそれぞれ3色ずつ選択した。実際の風景の色に対する嗜好に関しては、調査実施場所である「南知多おもちゃ王国」内の配色に特徴のある地点（屋外、屋内双方を含む）を18カ所選択し^{*2}、その地点の写真をあらかじめ撮影したものを、白色台紙上に配置して印刷したシートを用い（2色配色と同様、3枚の個別のシートに分けて配置した）、色使いとして好きなものと嫌いなものを3点ずつ選択させた。

3. 結果と考察

3.1 結果の整理

調査にご協力いただいた回答者の内、母子ともに回答項目に欠損がない事例のみを分析の対象とした（53組、母親27才～46才、平均35.8才、子ども4才～10才、平均6.3才、男児20名、女児33名）。

結果の分析に当たっては、回答者の色嗜好パターンを類型化するために以下の処理を行った。まず、調査に用いた色サンプルを以下のグループに分類した。単色に対しては、その色相により、暖色（赤、ピンク、黄、等）、寒色（青、青紫、青緑、等）、中間色（緑、紫、黄緑、等）の3グループに分類した。また単色は、そのトーン（色の彩度と明度によって規定される色の系統：色調）によっても、ライト（lt：中彩度・高明度、あさい色）、ダーク（dk：中彩度・低明度、くらしい色）、ビビッド（v：高明度・高彩度、さえた色・原色）の3グループに分類された（単色に関しては、データ処理において色相とトーンという2種の属性を持つこととなる）。2色配色に関しては、対となる色のトーンの差異が際立っているトーン対比配色、色相の差異が際立っている色相対

比配色、その双方が際立って異なっているトーン・色相対比配色の3グループに分類された。風景写真に関しては、ドミナントカラー（その配色の印象を支配する色：主調色）のトーンにより、ライトとビビッドの2グループに分割した。また、写真内に含まれるアクセントカラー（配色において小面積で目立った印象をもたらす色：強調色）の色数の多寡によっても、色数の多い写真（色多）と色数の少ない写真（色少）の2グループに分割した（すなわち、風景写真に関しても、単色と同様2属性が存在することとなる）。写真のグループ化は、色彩学の知識を有する大学生4名が合議の上で行った。彼らには研究の目的を知らされてはいなかった。

本研究においては、各回答者が10種の色嗜好判断属性を持つこととなる（単色色相嗜好、単色色相嫌忌、単色トーン嗜好、単色トーン嫌忌、配色嗜好、配色嫌忌、写真トーン嗜好、写真トーン嫌忌、写真色数嗜好、写真色数嫌忌）。これらについて、各回答者はそれぞれ3つの色サンプルを選択するのであるが、回答者の3つの選択の内、2以上が同一カテゴリーサンプルであった場合に、そのカテゴリーを当該回答者の色嗜好属性とした（例えば、単色で好きな色としてライトトーンの色を2種、ビビッドトーンの色を1種選択した場合には、その回答者の単色トーン嗜好はライトとなる）。また、回答者の3つの選択が特定のカテゴリーに偏ることなく、すべて別々のカテゴリーのサンプルとなった場合には、当該回答者の色嗜好属性を不定とした（例えば、嫌いな2色配色として、色相対比配色、トーン対比配色、色相・トーン対比配色から1色ずつ選択した場合には、その回答者の配色嫌忌は不定となる^{*3}）。

また、各嗜好判断の際の回答者の回答の偏りを定量的に分析するために、以下の手続きに基づいたデータ処理を行った。回答者の嗜好/嫌忌の選択をカテゴリーに対する好ましさの投票とみなし、好ましいと判断されたカテゴリーに1点を加え、好ましくないと判断されたカテゴリーから1点を減じる。この操作により、各カテゴリーは最高3点、最低-3点の範囲で得点を得ることとなる（合計得点は常に0）。このように算出した各カテゴリーの得点に対し、式1に基づいて平均情報量（エントロピー）を算出した（実際には各カテゴリー得点を1以上とするため、それに4点を加えている。したがって、ここで求めた平均情報量の絶対値に意味はなく、当該色嗜好属性の選択の偏りを回答者間で比較する際にのみ用いること

とする)。特定カテゴリーに嗜好判断が集中する場合には平均情報量が小さくなり、複数のカテゴリーに嗜好判断が分かれる場合には平均情報量は大きくなる。この処理により、単色色相嗜好情報量、単色トーン嗜好情報量、配色嗜好情報量、写真嗜好情報量の4変数を得た(風景写真に対する嗜好判断には、ドミナントトーンと写真に含まれる色の多さの2つの属性が存在するが、それぞれ2カテゴリーしか持たないことを鑑み、それらを統合して4カテゴリー(ライト・色多, ライト・色少, ビビッド・色多, ビビッド・色少)分類とした上で、嗜好判断のばらつきを示す情報量を算出した)。

$$H = - \sum_{i=1}^n P_i \log_2 P_i$$

ただし、 n : 評価対象数

P_i : 各対象の選択確率

式1 平均情報量 (エントロピー)

以下の各節では、上記の方法により算出した指標を用い、母子世代間(3.2節)、男児女児間(3.3節)の色嗜好の差異、および、母子間の色嗜好の連関(3.4節)を分析するとともに、各回答者グループの色嗜好の偏り(3.5節)に関する検討を行う。

3.2 色嗜好の母子世代間比較

本節では、母親回答者群と子ども回答者群の間の、色嗜好属性の差異を検討する。本節での分析においては、回答者群はそれぞれ群ごとにプールされているので、特定の母子の間の色嗜好の連関が対象となっているわけではないことに注意しなければならない(世代としての母親世代と子ども世代との全体的な色嗜好判断の差異が分析対象となる)。

3.2.1 単色嗜好

図1に単色色相嗜好、図2に単色色相嫌忌として選択されたカテゴリーの比率を、それぞれ世代ごとに示した(図中の数字は度数[人数]を示す。以降の図も同じ)。母親世代・子ども世代とも、寒色を好み、中間色を忌避する比率が高い。中間色、暖色に対する嗜好、寒色、暖色に対する忌避とともに、母子間で比率の差異は見られなかった。² 検定の結果、世代間に色相嗜好、色相嫌忌の比率に有意な差異がないことが示されている(それぞれ、 $\chi^2(3) = 1.01$; $\chi^2(3) = 0.83$, とともに $n.s.$)。図3

に単色トーン嗜好、図4に単色トーン嫌忌を示す。色相と同様、トーンに関しても世代間の比率の差異は見られず、好きなトーンとしてはライトとビビッドがほぼ同比率となり、嫌いなトーンとして選ばれるものは圧倒的にダークが多かった。母子間にトーン嗜好、トーン嫌忌の比率に有意な差異は認められなかった(それぞれ、 $p = .36$; $p = .14$, とともに $n.s.$)⁴。

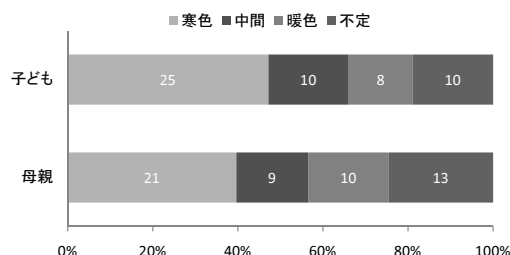


図1 単色色相嗜好 (母子)

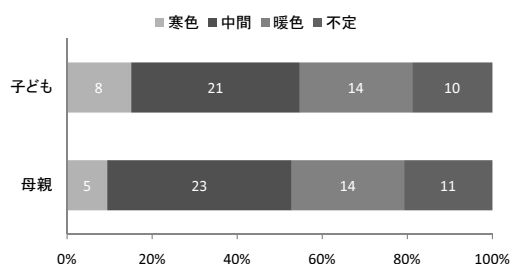


図2 単色色相嫌忌 (母子)

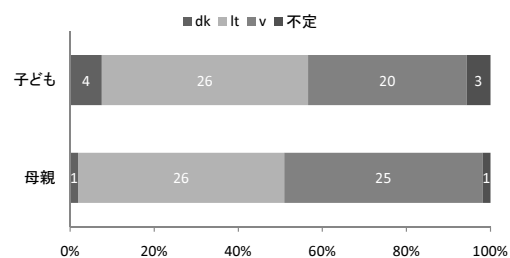


図3 単色トーン嗜好 (母子)

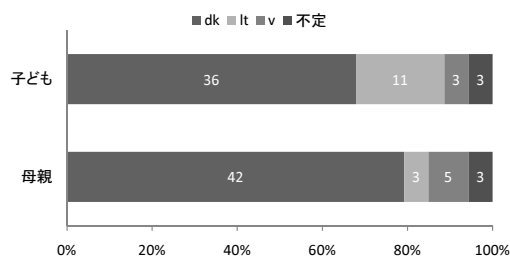


図4 単色トーン忌避 (母子)

3.2.2 配色嗜好

図5に配色嗜好を、図6を配色忌避の比率を母子ごと

に示す（トーン・色相対比配色を嗜好配色とした回答者が存在しなかったため、嗜好配色にはトーン・色相対比配色カテゴリーは存在しない）。好きな配色、嫌いな配色とも、トーン対比配色である回答者が多いという、アンビバレントな結果が得られている。母子間の顕著な比率の差異は認められない（それぞれ、 $\chi^2(2) = 1.36$; $\chi^2(3) = 4.60$, ともに *n.s.*）。

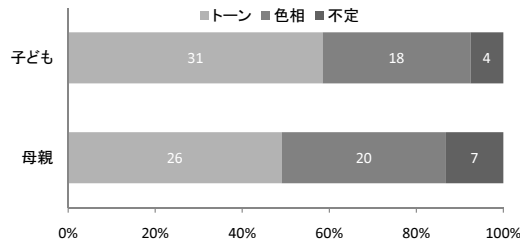


図5 配色嗜好 (母子)

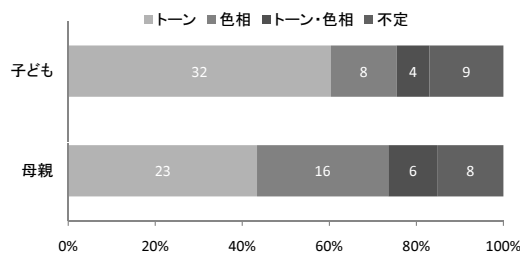


図6 配色忌避 (母子)

3.2.3 風景写真に対する色嗜好

次いで、「おもちゃ王国」内の配色に特徴を持つ風景の写真に対する嗜好・忌避判断の分析を行った。図7、8に風景写真のドミナントトーンに対する嗜好・忌避判断を、図9、10に風景写真に含まれるアクセントカラーの色数の多寡に対する嗜好・忌避判断の結果を、母子ごとに示す。母子ともにライトトーンを主調とする配色の写真を好んだが、母親回答群においてその傾向がより顕著であった ($\chi^2(1) = 5.16$, $p < .05$)。忌避トーンに関しては母子間の比率の差異は認められず ($\chi^2(1) = 0.16$, *n.s.*)、ライトトーンを忌避する比率が高かった。色数嗜好に関しては、子ども回答者群においては色数が多いものを好む傾向が高い一方、母親回答者群においては色数多・色数少両カテゴリーの比率が均衡していた ($\chi^2(1) = 3.83$, $p < .05$)。色数忌避に関しては、両回答者群において同様に色数の多いカテゴリーが嫌われている ($\chi^2(1) = 0.50$, *n.s.*)。

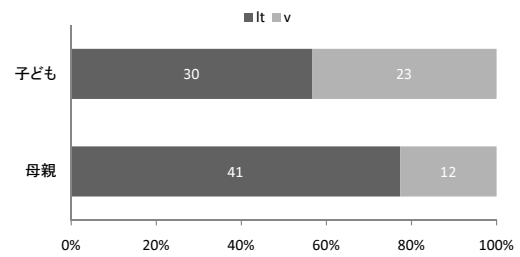


図7 写真トーン嗜好 (母子)

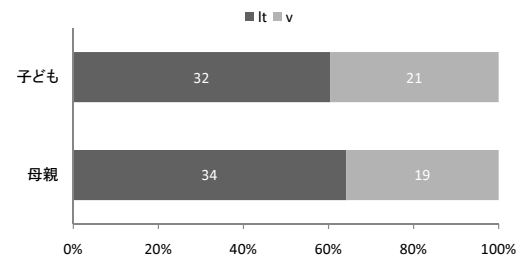


図8 写真トーン忌避 (母子)

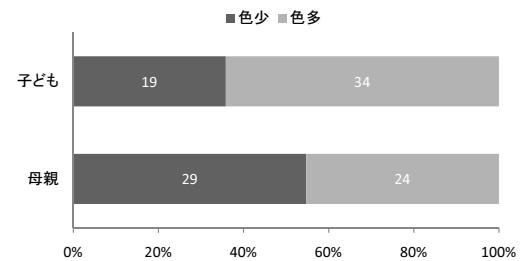


図9 写真色数嗜好 (母子)

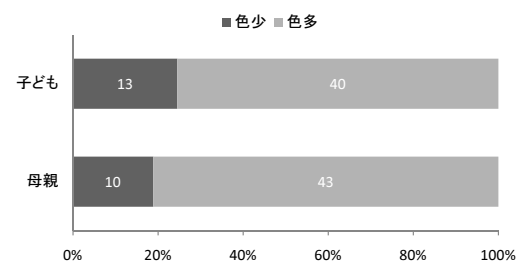


図10 写真色数忌避 (母子)

母子の世代間比較においては、単色、配色に対する嗜好・忌避判断には差異が認められなかったものの、実際の風景写真に対する判断においては、子どもは母親に比べて、ビビッドトーンを主調とし、アクセントカラーの色数が多い配色、すなわちより派手な配色を嗜好する傾向が高いことが確認された。

3.3 児童の色嗜好の男女間比較

本節では、男女児間の色嗜好の差異を検討する。

3.3.1 単色嗜好

図11に単色色相嗜好, 図12に単色色相嫌忌, 図13に単色トーン嗜好, 図14に単色トーン忌避の比率を, 男女児ごとに示した。男児は寒色を好む傾向が強いが, 女児の色相嗜好は寒色, 暖色, 中間色の間でほぼ同等の比率を示していた ($p = .07$)。嫌いな色相としては, 男児が暖色を, 女児が中間色を上げる傾向が強い ($p = .04$)。トーン嗜好・忌避としては, 男児はビビッドを好みライトを嫌う, 女児はライトを好みダークを嫌う傾向が比較的顕著に認められている (トーン嗜好: $p = .03$, トーン忌避: $p < .001$)。男児がビビッド, 女児がライトトーンを好むという結果は, 小学生を対象とした松田らの先行研究と一致するものである [11] [12]。また, 幼稚園児を対象とした調査では, 男児の寒色嗜好, 女児の暖色嗜好 [13], さらに女児のダークトーン忌避 [14] などの存在が知られており, いずれも今回の調査と整合する。

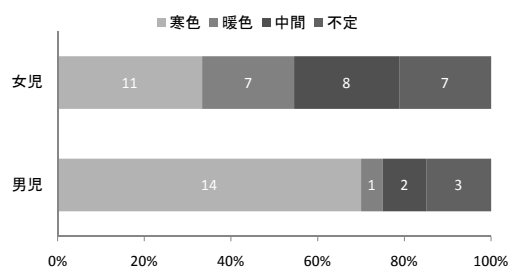


図11 単色色相嗜好 (男女児)

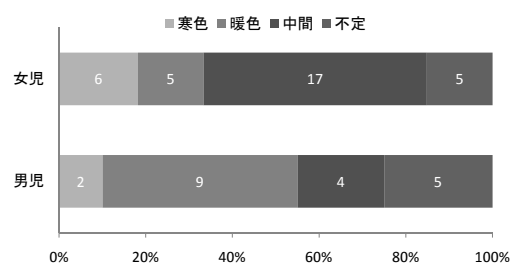


図12 単色色相忌避 (男女児)

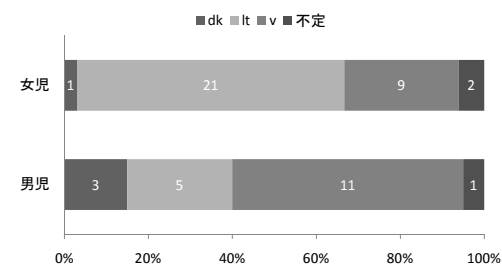


図13 単色トーン嗜好 (男女児)

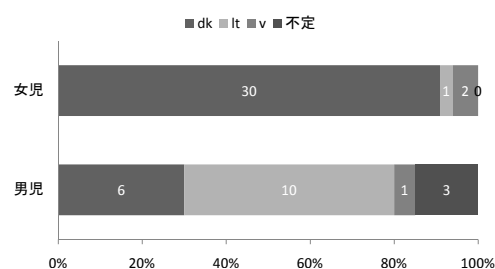


図14 単色トーン忌避 (男女児)

3.3.2 配色嗜好

図15に配色嗜好を, 図16を配色忌避の比率を男女児ごとに示す (トーン・色相対比配色を嗜好配色とした回答者が存在しなかったため, 配色嗜好にはトーン・色相対比配色カテゴリーは存在しない)。好きな配色としては, 男児でトーン配色が選ばれる比率が高くなっているが, 女児ではトーン配色と色相配色がほぼ同比率となっている ($p = .06$)。一方, 嫌いな配色としては男女ともトーン配色を選ぶ比率が際立って高くなっている ($p = .64, n.s.$)。

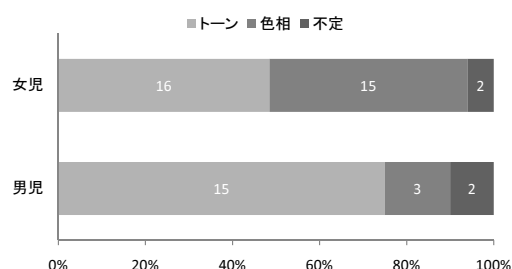


図15 配色嗜好 (男女児)

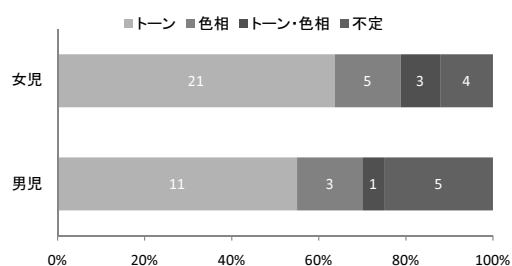


図16 配色忌避 (男女児)

3.3.3 風景写真に対する色嗜好

図17, 18に風景写真のドミナントトーンに対する嗜好・忌避判断を, 図19, 20に風景写真に含まれるアクセントカラーの色数の多寡に対する嗜好・忌避判断の結果を, 男女児ごとに示した。写真のトーンの好みに関しては, 男児がビビッドを, 女児がライトを好んでおり

($\chi^2(1) = 9.26, p < .01$), 上述の単色に対する嗜好傾向が反映されたものとなった。嫌いなトーンとしては、弱いながら有意傾向を持つ差異が男女児間に認められ、男児がライトトーンを嫌う傾向が女児よりも高いことが示されている ($\chi^2(1) = 2.87, p < .10$)。写真に含まれるアクセントカラーの色数に対しては、男児は色数が多い写真を圧倒的に好む(全男児が色数の多い写真を好んでいる)一方、女児には少なからず色数の少ない落ち着いた配色の写真を好む者もいる ($\chi^2(1) = 17.95, p < .001$)。色数に対する忌避としては、男女児ともに色数の多い写真を嫌っているが、その傾向は女児においてより顕著である ($\chi^2(1) = 4.15, p < .05$)。

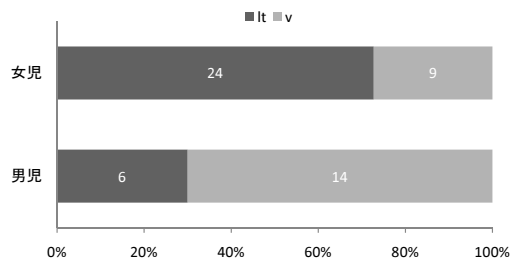


図17 写真トーン嗜好 (男女児)

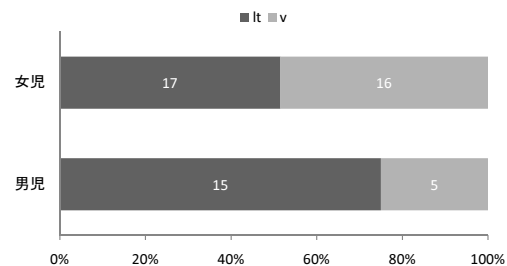


図18 写真トーン忌避 (男女児)

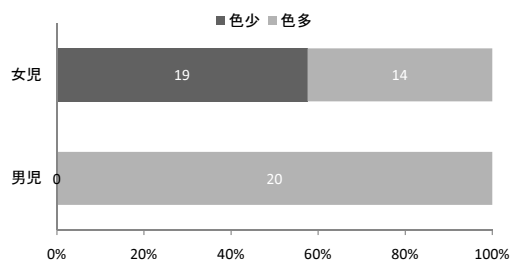


図19 写真色数嗜好 (男女児)

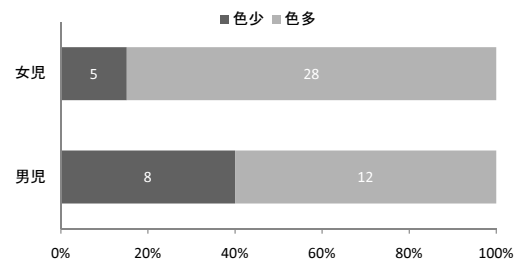


図20 写真色数忌避 (男女児)

今回の調査では、男児の色嗜好傾向として、ビビッドな色、明度差の激しいトーン配色、色数の多い写真など、より“派手な”印象を持つ色・配色に対する好みが見られる一方、女児では比較的“落ち着いた”印象の色・配色(ライトトーン、色数の少ない写真)に対する嗜好を示す者も存在するなど、主に好きな色に対する判断において男女児の間の差異を確認することができた。

3.4 色嗜好の母子間連関

本節では、母子の色嗜好の間の連関について分析を行う。母子間の色嗜好指標のクロス集計を用いることにより、母子ペア間で色嗜好類型がどの程度一致するのかを検討する。

3.4.1 単色嗜好

図21に単色色相嗜好、図22に単色色相忌避、図23に単色トーン嗜好、図24に単色トーン忌避の、母子間の連関を示す。母子間に特に連関のみられる色嗜好指標は存在しなかった。拡張されたFischerの正確確率検定による独立性の分析の結果、いずれも有意な独立性は認められなかった(それぞれ $p = .82, .18, .61, .28$)。この結果は、母子ペア間に特定の単色嗜好判断の偏りが存在しないこと、すなわち例えば「寒色が好きな母親の子供は、暖色が好きな母親の子供よりも、寒色を好む傾向が高い」というようなことはないことを示している(色相忌避、トーン嗜好・忌避に関しても同じ)。

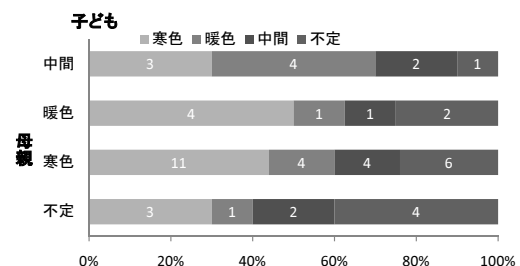


図21 単色色相嗜好 (母子連関)

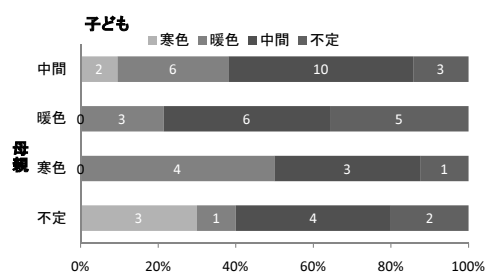


図 22 単色色相忌避 (母子連関)

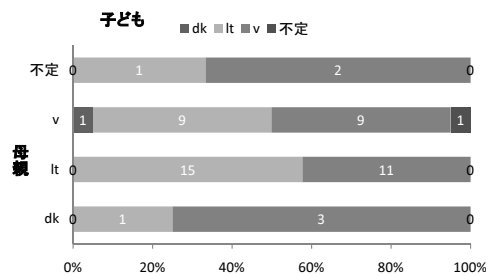


図 23 単色トーン嗜好 (母子連関)

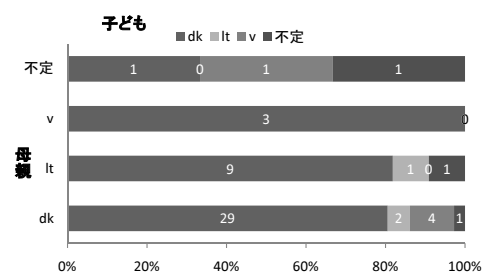


図 24 単色トーン忌避 (母子連関)

3.4.2 配色嗜好

図 25 に配色嗜好, 図 26 に配色忌避の母子間連関を示す。単色嗜好と同様, 配色嗜好に関しても, 有意な独立性を持つ色嗜好属性は認められなかった (配色嗜好: $p = .36$, 配色忌避: $p = .22$)。

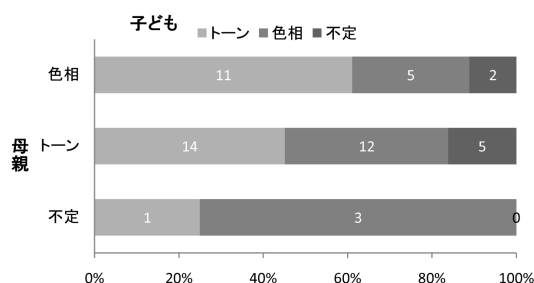


図 25 配色嗜好 (母子連関)

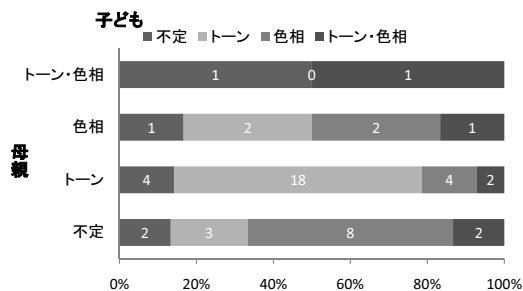


図 26 配色忌避 (母子連関)

3.4.3 風景写真に対する色嗜好

図 27, 28 に写真の風景のドミナントカラーのトーンに対する嗜好・忌避の, 図 29, 30 に写真の配色のアクセントカラーの色数に対する嗜好・忌避の母子間連関を示した。トーン忌避, 色数嗜好・忌避に関しては, 母子間の連関が認められなかった (それぞれ, $\chi^2(1) = 2.10$; $\chi^2(1) = 0.82$; $\chi^2(1) = 0.20$, いずれも $n.s.$)。一方, 写真におけるトーン嗜好に関しては, ライトトーン嗜好の母親の子どもは, ビビッドトーン嗜好の母親の子どもに比べ, 有意にライトトーン嗜好の比率が高くなっていた ($\chi^2(1) = 10.07$, $p < .01$; クラメールの連関係数 0.44)。

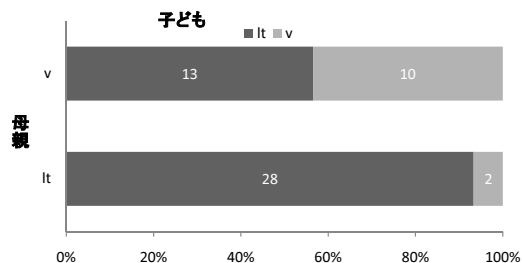


図 27 写真トーン嗜好 (母子連関)

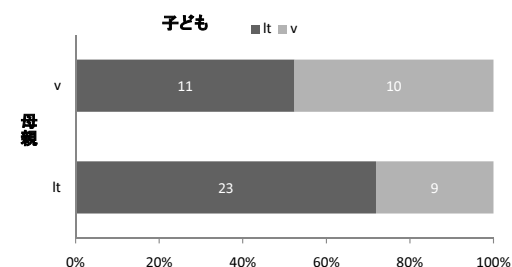


図 28 写真トーン忌避 (母子連関)

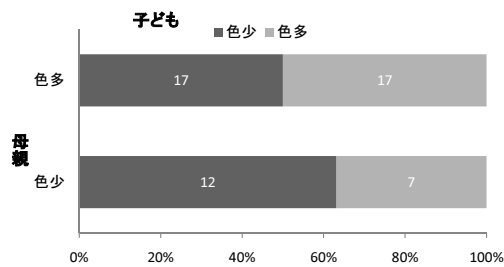


図29 写真色数嗜好 (母子連関)

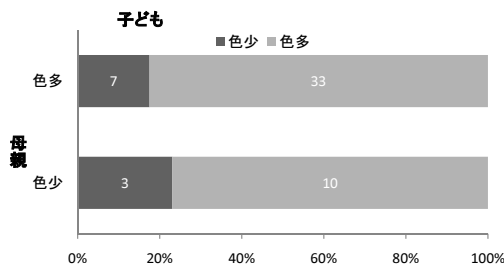


図30 写真色数忌避 (母子連関)

本調査においては、単色や2色配色といった単純な対象に対する嗜好判断では、母子間において有意な連関を認めることはできなかった。しかしながら、実際の風景を撮影した写真という、より複雑な視覚対象に対する嗜好判断においては（写真に含まれる配色におけるドミナントカラーのトーンに対する好みという側面において）、母子間で有意にその嗜好パターンが伝播することが起こりうることを示された。

3.5 色嗜好判断の偏りの分析

本節では、選択肢の中から、好きな色・配色、もしくは、嫌いな色・配色を複数選出する際の選択行動のばらつきを、平均情報量（エントロピー）を用いて分析した。同一カテゴリーから偏って選ぶ傾向が高ければ情報量は低く、複数のカテゴリーにまたがって偏りなく選ぶ傾向が高ければ情報量は高くなる。

3.5.1 母子間の比較

母親回答者群および子ども回答者群の、単色色相情報量、単色トーン情報量、配色情報量、写真情報量（それぞれの算出方法は3.1節を参照のこと）の群内平均値を算出し、図31に示した（エラーバーは標準偏差を示す）。t検定の結果、単色トーン嗜好に対する情報量において、有意な差異が認められた（母親の選択の方がばらつきが大きい： $t(104) = 2.16, p < .05$ ）。その他の情報量に関しては、母子間で有意な差異は認められなかった（単色色

相： $t(104) = 0.47$ 、配色： $t(104) = 0.53$ 、写真： $t(104) = 1.08$ 、すべて $n.s.$ ）。

次いで、4つの情報量指標に関し、母子間の相関を検討した。表1に、各情報量のPearsonの積率相関係数を示す。配色情報量において、弱いながらも有意な正の相関係数が得られている。この結果は、2色配色に対する好悪の選択の際に、選択のバラつきが大きい母親の子どもは、同様に選択のバラつきが大きくなる傾向を有することを示すものである。

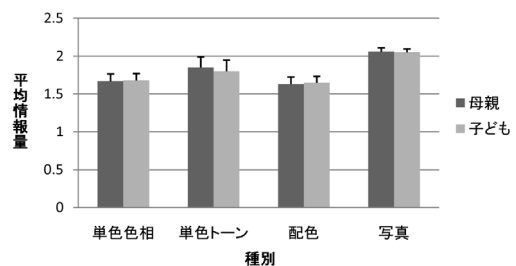


図31 平均情報量 (母子比較)

表1 情報量の母子間相関係数

単色色相情報量	単色トーン情報量	配色情報量	写真情報量
.07	.03	.30*	-.02

$n = 53, *p < .05$

3.5.2 男女児間の比較

図32に、4種の平均情報量の男女児群別の平均値を示す（エラーバーは標準偏差）。単色色相情報量、単色トーン情報量において、男児よりも女児の方が平均情報量が有意に高くなること、すなわち女児の方が単色の嗜好判断に際し、男児よりもばらつきが大きくなること示された（それぞれ、 $t(51) = 4.29, p < .01$ ； $t(51) = 2.30, p < .05$ ）。配色情報量、写真情報量に関しては、男女児間に有意な差異は認められなかった（それぞれ、 $t(51) = 0.81$ ； $t(51) = 1.01$ 、ともに $n.s.$ ）。

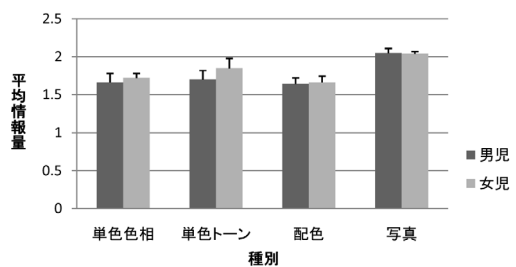


図32 平均情報量 (男女児間比較)

3.5.3 情報量間の相関

表2に、4種の情報量指標間の積率相関係数を示す。単色色相情報量と単色トーン情報量との間に、弱いながらも有意な負の相関係数が得られている。単色嗜好選択において、トーン属性のバラつきが大きい回答者は、色相属性のバラつきが少なくなる（逆も同じ）ことを示す結果である。より重視する色属性の違い（トーンを重視するか、もしくは、色相を重視するか）によって、属性間でバラつき方が異なったのではないかと推察される（例えば、単色嗜好の判断に際し、色相を重視する回答者は、色相のバラつきが少なくなり、相対的に重視されないトーンのバラつきが大きくなる）。

表2 情報量間の相関係数

	単色色相情報量	配色情報量	写真情報量
単色トーン情報量	-0.27*	0.02	0.02
単色色相情報量		-0.16	-0.16
配色情報量			-0.08

$n = 106, *p < .05$

本節では、好きな色、嫌いな色を選ばせる際の選択行動のばらつきを、平均情報量を用いて検討した。男女児間の若干の差異はみられるものの、幼児期から児童前期にある子どもにおける選択のばらつきが、母親のそれとほぼ同等であることが示されている。この結果は、幼稚園児を用いた色嗜好分析において、より年少の子供において色嗜好のばらつきが強く、年齢が上がるにつれて安定した色嗜好が確立するとした清水の先行研究とは異なる結果である [13]。今回の検討で得られた結果との差異に関しては、色嗜好の計測手法の違いに起因するものではないかと考えられる。発達段階を経るにしたがって、色嗜好がどのように変容し、どのように安定していくのかに関しては、今後の研究を待ちたい。

4. まとめ

本研究では、色嗜好・色嫌忌が母子間でどのように関連するのかを種々の評価対象（単色、2色配色、[遊施設内の] 写真）を用いて検討した。母子53組を対象とした調査の結果、単色や2色配色といった単純な対象に対する嗜好・嫌忌判断では、母子間において有意な関連を認めることはできなかった（特定の色相やトーン、配色パターンを好む母親の子どもが、当該の色を好む傾向が高いわけではない）。しかしながら、実際の風景を

撮影した写真という、より複雑な視覚対象に対する嗜好判断においては、中彩度・高明度の色（ライトトーン）が主調色として含まれる写真を好む母親の子どもが、同様にライトトーンドミナントの写真を嗜好対象として選択する傾向が強いなど、母子に有意な連関が存在することが認められた。母親も決定に参加した居住環境（母親が好む配色が多く含まれると想定される）で日常生活をすることにより、子どもは母親が好む配色を目にする機会を豊富に持つこととなる。対人認知の領域では、接触する機会の多い対象に対しては、そうではない対象よりも、好感を持ちやすくなるということが古くから知られている（単純接触説：[14]）。単純接触効果は、人を対象とした場合のみならず、事物を対象とした場合にも生起する。今回の調査で得られた、実際の環境における配色に対する嗜好のパターンの有意な母子間伝播も、単純接触を用いて理解可能な事象である。今回の調査では、単色や2色配色に関しては色嗜好の有意な母子連関が見いだされなかった。子どもが日常生活空間において、純粋な単色や単純2色配色として母親の好む色を経験する頻度が、実際の居住空間配色に比べて低いことがその原因としてあげられる。また、実際の建物等を写した写真のような複雑で具体的な評価対象の方が、単色や2色配色といった単純で抽象的な対象よりも、好悪判断に際して単純接触の効果がより強く表れた可能性も想定することができる。

今回の調査においては、実際の調査実施の制約から、比較的少数の調査回答者のデータを基に考察を行った。今後は調査対象を拡大するとともに、調査対象者としての子どもの年代を独立変数とした研究計画を立案することにより、色嗜好の母子間伝播に関し、より詳細な検討を加える必要がある。

謝辞

本研究の推進に当たっては、株式会社名鉄インプレス（南知多ビーチランド）石堂様に多大なご助力を賜りました。記して謝意を表します。また、調査の実施には、日本福祉大学子ども発達学部心理臨床学科総合演習（中村クラス）受講生（調査当時）の協力を得ました。合わせて感謝いたします。

注

- *1 Doobによれば、態度とは社会的に重要な事柄と、動因に値する反応、すなわち、「良い 悪い」という評価、あるいは「好意的 非好意的」といった感情との強化による連合を示すものである [9]。本稿で検討の対象とする色嗜好においても、特定の色と好悪、快不快との連合が問題となる点においては、上述した心理学研究における態度の一般的定義が該当する。すなわち、色嗜好とは回答者の「色に対する態度」であると考えることが可能である。
- *2 データ処理の際の制約を鑑み、配色に含まれる色のトーン（色調）がほぼ均一な個所を選択して刺激写真を撮影した。
- *3 写真トーン / 写真色数に関する嗜好判断については、その対象となるカテゴリーが2種しか存在しないため、これらの嗜好属性が不定となることはない。
- *4 期待度数が5よりも小さくなるセルが全体の20%を超える際には、² 検定ではなく2分割表以上に拡張されたFischerの正確確率検定を用いた。以下の分析でも同様の対応を行っている。

引用文献

- [1] 日本色彩学会：新編 色彩科学ハンドブック [第2版]，東京大学出版会（1998），670-675.
- [2] 高橋晋也・羽成隆司：色嗜好表出における認知要因，*日本色彩学会誌*，29-1（2005），14-23.
- [3] 財団法人日本色彩研究所：日本人の色の好み 1979～1992（1995）
- [4] M. Saito: A comparative study of color preferences in Japan, China and Indonesia, with emphasis on the preference for white. *Perceptual and Motor Skills*, 83（1996），115-128.
- [5] H. J. Eysenck: A critical and experimental study of colour preferences. *The American Journal of Psychology*, 54-3（1941），385-394.
- [6] F. M. Adams & C. E. Osgood: A cross-cultural study of the affective meanings of color. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 4-2（1972），135-156.
- [7] J. P. Guilford: There is a system in color preferences. *Journal of Optical Societies of America*, 30-1（1940），455-459.
- [8] N. Camgöz, C. Yener & D. Güvenç: Effects of hue, saturation, and brightness on preference. *Color Research and Application*, 27-3（2002），199-207.
- [9] L. Doob: The behavior of attitude. *Psychological Review*, 54（1947），135-156.
- [10] 山岸政雄・河内久美子・可部野和子：子育て環境と色彩景観。金沢学院短期大学紀要，7（2009），57-68.
- [11] 松田博子・名取和幸・仲谷洋平：色の好みとパーソナリティについての研究 その3：小学生の場合。日本色彩学会誌，25（2001），30-31.
- [12] 松田博子・名取和幸・仲谷洋平：色の好みとパーソナリティについての研究 その4：小学生の場合 2。日本色彩学会誌，26（2002），88-89.
- [13] 清水陽子：子どもの色彩嗜好の発達と母親の色彩選択意識 性差を中心に。日本教育心理学会総会発表論文集。42（2000），532.
- [14] 金村美千子：幼児の色彩好悪について。日本保育学会大会研究論文集，39（1986），486-487.
- [15] 宮本聡介・太田信夫：単純接触効果研究の最前線，北大路書房，（2008）.